2007

3R+1 EcoCycle

活動報告書

環境サークルエコレンジャー

全学学類・専門学群代表者会議　生活環境委員会宿舎班

印刷方式：A4　両面　１面２ページ集約

目次

1. はじめに
2. 従来のリユース活動と「3R+1 EcoCycle」始動の経緯
3. 「3R+1 EcoCycle」取り組み詳細
   3-0. 取り組みの特徴
   3-1. 準備段階
   3-2. 計画段階
   3-3. 実施段階①：広報
   3-4. 実施段階②：品物の引き取り・保管
   3-5. 実施段階③：Web サイト開設と応募メールの募集
   3-6. 実施段階④：受取人の決定と連絡
   3-7. 実施段階⑤：品物・メッセージの受け渡し
4. 大学側の支援
5. 提供者・新入生の反応
6. 収支報告・協賛金について
7. 継続的開催へ向けての改善策
8. スタッフ・協力者一覧
9. 添付資料
   9-1. 「3R+1 EcoCycle」原案
   9-2. 「3R+1 EcoCycle」広告　＜在学生向け配布用・新入生向け郵送用＞
   9-3. 運営ガイドライン
   ＜情報処理関係・広報・提供品回収方法・受け渡し日へ向けて＞
   9-4. 提供品一覧

1. はじめに

このたび、私たち環境サークルエコレンジャー・全代会厚生委員会宿舎班は 筑波大学の学生に生活用品の「リユース（再使用）」の機会を提供する企画「3R+1 EcoCycle（スリーアールプラスワン エコサイクル）」を立ち上げ、さまざまな困難を乗り越えつつ成功のうちに終了することができました。これはひとえに筑波大学学生部学生生活課・施設部・体芸支援室・平砂/一の矢 両学生宿舎管理事務所等関係各所のみなさまのご理解とご協力のおかげであり、みなさまのご厚意に一同深く感謝いたしております。この場にて御礼申し上げます。

この企画は、人員・予算・時間など極めて限られた規模の資源で、生活用品を提供する側の在学生・卒業生とそれを譲り受けて使う側の新入生の双方に可能な限り大きな効果をもたらすことができるよう考案したものです。私たちの意図した「効果」とは、以下のようなものです。

1.在学生・卒業生の不要になった生活用品を新入生が利用することで、廃棄・新規購入される生活用品が減少する。

2.単に「品物を受け渡す」のみならず、提供者からのメッセージを伝えることで 受け取る側にものを大切に使い続けることの意義を伝える。

3.ものを人から人へ引き継いで長く使い続けるという「リユース」の概念を、学生全体により身近に感じてもらう。

4.学生が入れ替わるごとに大量のごみが発生するという大学・学生宿舎特有の問題に対し、学生全体に認識を促す。

5.全学的な取り組みを行うことで、筑波大学に携わるすべての人に 大学として環境対策を行っていることを伝え、現代社会においてより積極的な環境志向の行動が必要なことを認識してもらう。

このような効果がこれからの筑波大学に顕れることを期待しておりますが、そのためには取り組みの継続・発展が不可欠です。今回の経験を礎として、発生したさまざまな問題点を反省し、より充実した企画を確立していく所存です。

今回の活動を振り返り、経緯と反省点・改善点等をまとめた報告書を作成いたしましたのでご一読ください。この経験を土台とし、次回はより充実した形で開催できることを希望しておりますので、今後とも私たちの取り組みへのご支援をよろしくお願いいたします。

2007 年 6 月 1 日
3R+1 EcoCycle 発起人　山本泰弘
（環境サークルエコレンジャー・生活環境委員会／国際総合学類 2 年）

2. 従来のリユース活動と「3R+1 EcoCycle」始動の経緯

ここでは、従来行われてきた筑波大生によるリユース活動の歴史と、「3R+1 EcoCycle」が立ち上がった経緯について述べる。

＜リユース活動の始まりとエコレンジャーによる「リサイクル市」＞

1996 年、生物資源学類生の有志が 学生が入れ替わる毎年 3，4 月に家具・家電など大量のごみが捨てられ新入生によって新しい製品が持ち込まれることの非効率性に着目し、引越しをする学生から不要な品物を引き取り安価で販売するという手法の中古品市「リサイクル市」が行われた。これは本来認められていない金銭授受を伴う取り組みであったため、その後設立された環境サークルエコレンジャーが主体となり無償による家具や家電製品の提供を行う形に改められた。

以来約 10 年間にわたりエコレンジャーの活動として「リサイクル市」が継続された。年ごとのリーダー役を多くの場合上級生が務め、サークル内から数名のコアスタッフを設定し早期よりミーティングを重ね計画を練っていった。その過程で、

・主に春季休業中に車で提供者宅を訪問して引き取りを行う
・陸上競技場北側の本部棟旧棟を品物の保管場所とする
・入居日の最終日に一定のスペース（テニスコートなど）を使用し一斉頒布会を行う
・公平を期すため、あるいは来場者を楽しませるためのさまざまな工夫が準備される

といったスタイルが形成されていった。引き取りや頒布会の際にはエコレンジャーの他のメンバーや OB/OG、個人的な友人などを動員する必要があった。

＜「リサイクル市」休止から「3R+1 EcoCycle」の始まりへ＞

ノウハウを蓄積し、継続的な運営を視野に入れ体制が確立されてきた「リサイクル市」だったが、以下のような“壁”に直面した。

⑴ 春季休業中の連日の車での引き取り・点検作業・当日のイベント運営など、担当スタッフの負担が非常に重い。しかもそのすべてをエコレンジャーのメンバーが担っていた。

⑵ 入居日当日、会場での先着順による受取人決定という方式をとっていたため、“無料”・“早い者勝ち”という点に注目した大勢の人が会場に殺到し、混乱が生じた。品物が手に入ると期待していたが受け取れず、新たに購入しなければならなかった来場者も多かった。

⑶ ⑵のような状況下で、主催するエコレンジャーの負担する労力の割に「ものを再使用する・長く使い続ける」という精神が伝わりにくい。

⑷ エコレンジャーのメンバー数が減少し、これまでの取り組みを同規模に運営することが困難になった。

これらの理由により、2005 年秋、翌年の「リサイクル市」開催は休止とすることが当時のメンバー間で決定された。

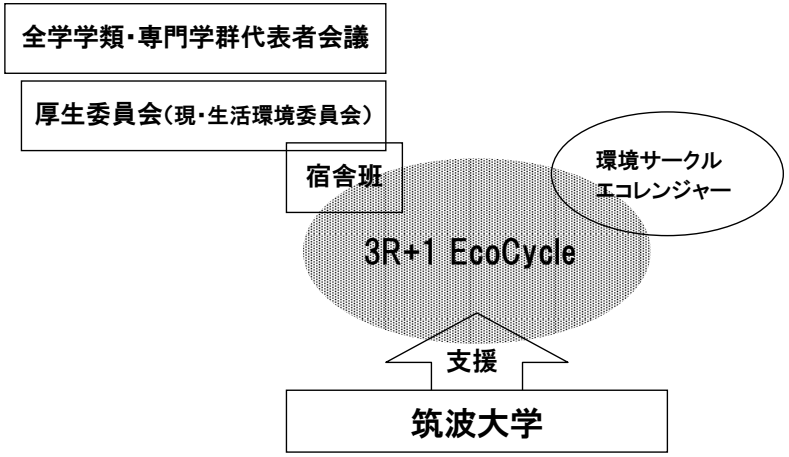
「リサイクル市」は長年の積み重ねによりエコレンジャーの恒例活動として一定の認知度を得ていたため、休止期間中も手持ちの家電を引き取ってほしいという依頼や再開を望む声が寄せられていた。このような事実を受け、2006 年秋、全代会からエコレンジャーへ「リサイクル市」を再開する場合協力したいとの申し出がなされた。

この経緯を受け、2006 年 11 月中旬、翌年の生活用品リユースの取り組みについて方針を決めかねていたエコレンジャーと、そのための協力を打診していた全代会、大学学生生活課の間でミーティングが開かれ、それまでの経緯の確認と以降の展開が模索された。この段階ではエコレンジャーのサークルとしての態度が未定であったため、12 月中旬までに企画実施の有無を学生生活課へ答申するという結論に終わった。

以後数週間にわたり、エコレンジャー内で 2007 年の「リサイクル市」開催の是非について話し合いが行われた。数回にわたる協議の末、「以前のような大きな取り組みは、実行するに越したことはないが自分たちが運営するのは不可能に近い」・「全代会が主催するのであれば、自分たちが協力する側に回ってもよい」という意見が大勢を占め、今回も生活用品の再使用のための取り組みは行わないという結論に至るかと思われた。しかし、エコレンジャーメンバーの山本（国際総合・当時１年）が以前の取り組みをより効率化・省力化した新たな案を作成して全代会に提示することを提案し、生活用品再使用の取り組みはかろうじて復活の路を歩み始めた。

山本が提案した原案（別紙）をもとに、小林前全代会議長の指揮により全代会厚生委員会（現・生活環境委員会）宿舎班の班員３名が取り組みの企画を担当することとなり、発案者の山本とかつての「リサイクル市」経験者であるエコレンジャーメンバーの山崎（日本語日本文化・当時３年）の計５名が中心となって、新たな計画「3R+1 EcoCycle」が立ち上げられた。企画が進展するにつれエコレンジャーメンバー・一般学生が参加し、最終的には９名の構成員で実行に至った。

＜組織図＞



＜時系列＞

1996～2005
生物資源学類有志
↓
エコレンジャー
「リサイクル市」

2005 秋
「リサイクル市」
休止を決定

2006 秋
全代会より
協力の打診

2006 12 月中旬
3R+1 EcoCycle
立ち上げ

3.「3R+1 EcoCycle」取り組み詳細

ここでは、「3R+1 EcoCycle」の取り組みの内容について準備段階から実行段階まで順を追って説明する。

3-0. 取り組みの特徴

「3R+1 EcoCycle」は、まだ使用可能だが不要になってしまった生活用品を在学生や卒業生から募り、新生活を始めるにあたって必要なものの多い新入生に提供し長く使い続けてもらうことを目的とした活動である。その方針は従来行われていた「リサイクル市」と共通のものだが、より少人数で合理的に運営しかつ最大限の効果を得るために、以下のような策をとり新たな形の取り組みとすることとした。（＜＞内は「リサイクル市」についての反省点である。）

①環境サークルエコレンジャーのみが主体となるのではなく、全代会厚生委員会（現・生活環境委員会）宿舎班との共催とし、大学とも協力体制を築いた。
＜環境サークルエコレンジャーのメンバーに加え OB,OG なども巻き込んだ規模で行われており、サークルの担う活動としては負担が大きすぎた。＞

②引き取りを行う期日と場所を設定して周知し、できる限り提供者が品物を持参することとした。
＜主に提供者の自宅へ車で訪問し品物を引き取るという方法がとられていた。不定期で依頼に応じて訪問を行っていたため年度末休業中忙殺されるメンバーが発生していた。＞

③入居日当日のイベントは開催せず、Web サイトとメールを利用して品物の受取人をあらかじめ決定し、入居日当日に受け渡しのみを行うという「事前申し込み・決定方式」をとった。
＜イベントを開催し主に先着順で受取人を決定していたが、前述のような混乱が発生したことと 受取人決定についてのルール設定を含む開催のための準備が複雑であったことが問題であった。＞

④新入生に対し、広報の時点では 3R+1 の意味を示し 品物の受け渡しの時点では提供者からのメッセージを伝えるという方法をとり、単なるモノの譲渡の仲介ではなく「ものを大切に使い続ける」ことの意義を訴えた。
＜「無料で生活用品が配布される」という点が注目されリユースそのものの意義や精神が十分に伝えられなかった。＞

3-1. 準備段階

2.のような紆余曲折を経て、新たな取り組み「3R+1 EcoCycle」をエコレンジャーと厚生委員会（当時）宿舎班との共催とし、12 月中旬 宿舎班のミーティングで担当者を割り当てるところから企画が始動した。従来の「リサイクル市」が毎年おおよそ 10 月前後から計画を開始していたのに比べると、いささか遅いスタートとなった。

今回は好条件が重なったこともあり実行にこぎつけることができたが、次回以降は全代会専門

委員会（あるいは全代会全体）の定例行事として年間計画化し、基盤を強化することが理想的と考えられる。一つ一つの取り組みの実行がそのときのメンバーの意思に委ねられるエコレンジャーにおいても、積極的に継続を推進していきたい。また、より幅広い学生団体・一般学生の参加を促進したい。

3-2. 計画段階

中心メンバーが決まった 12 月末から、「3R+1 EcoCycle」のスタッフミーティングが週に一度のペースで開催された（年末年始を除く）。ミーティングの流れとしては、山崎の指導を受けながら山本が作成したガイドライン（添付資料 9-3：添付資料 9-1 の原案に基づき、計画の詳細をまとめた文書）や広告の草案を各メンバーが吟味して意見を出し、改善するというものであった。厚生委員会宿舎班の担当外のメンバーからも協力を得ることができた。

「リサイクル市」時代の資料を参考にできた箇所もあったが、新たな取り組みとしては第一回目であり計画の立案にあたって未熟な面が見られた。ミーティングの進め方が不慣れであったり、草案に対し何をもとにして意見を出せばよいか戸惑ったりするという場面があった。計画全体のスケジュール・各メンバーの役割分担・作業マニュアルなどを余裕を持って作成することでより安定した取り組みになると考えられる。

提供された物品の保管場所については、学生生活課を通し総合研究棟 D 棟付近の敷地に立地する倉庫が利用可能であろうとの意向を受けていたが、実際の確認が遅れてしまった。倉庫の使用に関する認識の共有にも不十分な点が残り、反省すべきと捉えている。

新企画ということで手探りの中での立案・計画であったが、次回以降の取り組みでは今回の骨組みを参考とすることで 以上の計画段階で多々存在した反省点を改善しスムーズな立ち上がりが可能になると考えられる。

3-3. 実施段階①：広報

＜在学生・卒業生向け広告＞

限られた期間で効率的な運営を行うために、最も早く行うべきであった在学生・卒業生向けの広報から具体的な計画が着手された。ガイドラインで広報の手段と伝えるべき事項を洗い出し、可能なものについて担当部署・広告元と連絡を取ることとした。

在学生・卒業生への物品提供の広報は１月中旬から下旬にかけて内容を決定し、２月上旬から学内各所へのポスター掲示・配布用広告の設置を開始した。
（ポスターはミスコピー用紙を使用して作成し、配布用広告は不特定多数へむやみに配るのではなく希望する人のみが手に取れるような配布方法を考慮した。）

今回は掲示場所と届出の方法を探りながらの広報活動であったため２月下旬に掲示を開始した箇所もあり、学生が年度末休業に入る瀬戸際での広報であった。大学広報課発行の広報誌「STUDENTS」２月号には１ページの広告を掲載できたが、２月上旬に掲載を依頼した全代会広報誌「Campus」と「筑波大学新聞」は年度内の最終号の発行に間に合わず、断念せざるを得なかった。

＜新入生向け広告＞

受け入れ能力の小ささのため提供の殺到（他方では提供の不足）を懸念しつつのやや控えめな広報活動であったが、このようなリユース活動自体の認知度を向上させるためにもより早い時期からの計画的な PR 作戦が必要である。

新入生へ取り組みの内容と応募方法を伝える広告は、本年度より入学手続きの方法が変更されたこともあり伝達手段の選択肢が限られていた。しかし大学学生生活課・入試課の配慮により入学試験合格者全員に送付される合格通知・入学関連書類に広告を同封することができた。最も迅速かつ確実に入学者全員へ告知することのできるこの方法をとれたことが、予想を大きく上回る反響を得ることのできた理由であり、サークル単体では実現し得なかったことが大学との協力によって理想的な形で実現に結びついた顕著な例であると言える。

また、新入生にとって極めて印象が強いと思われる機会に大学と学生組織・サークルが共同で行う環境活動がアピールされたことで、入学後学生生活で触れる環境対策の取り組みに「こういうこと前にもやってたな」「やっぱり大学でも環境考える時代だよね」と潜在的に感じる素地が生まれていることを私たちは期待している。この取り組みの印象が風化してしまわないうちに、次なる新たな全学的な取り組みを打ち出すことが必要である。これが契機となって学生がよりエコロジーに関心を持ち、環境対策が日常的なこととして意識される大学・学生生活が実現することを切望する。

＜添付資料 9-2.「3R+1 EcoCycle 広告」参照＞

3-4. 実施段階②：品物の引き取り・保管

＜引き取り＞

２月から３月にかけての土曜日(2/17,24、3/3,10)と 引越しが集中すると思われる卒業式後の日・月曜日(3/25,26)に、各宿舎管理事務所の協力を得て平砂・一の矢共用棟(一の矢は隔回) 1 階ロビーを受付場所とし、生活用品の引き取りを行った。当初の計画では主に提供者の持ち込みを受け付け、可能な範囲で訪問回収を行うこととしていたが、２月を終えた時点で集まった品物の数がかなり少なかったため積極的に訪問を行う必要があった。しかし最終日までには相当数（約 70 点）の品物が集まり、こちらの処理能力を考慮し 3/26 午後には受付を終了した。

２月の二度の引き取り日は、提供が少ないことが予想されたため整備の遅れていた引き取りマニュアル作成のためのミーティングを兼ねた。本来ならば受付体制を整えた上で引き取り日を迎えるべきであったが、後手に回ってしまったことは反省点である。

具体的な引き取りの方法としては、「リサイクル市」時代のものを再編集したマニュアルをも

とにその場で品物についての聞き取りや確認をした上で引き取り、動作確認が必要な電気製品などは改めてテスト（冷蔵庫の場合は冷気の確認、電気ポット・暖房器具などは試験加熱など）を行うこととした。準備期間と人員の不足のため提供者のモラルを信頼しこのような手法をとったが、不良品の受付を防ぐためにその場で動作確認が行える状況を整えるべきである。現に、持ち込まれた冷蔵庫がテスト段階で動作しなかったという事例が１件存在した。

＜冷蔵庫について＞

冷蔵庫の引き取りと提供については、製品の特性上故障の確率が高く、取り扱いに特別な注意を要するので学生の行うリユース活動にはなじまないという意見が電機店店員から寄せられた。運搬も困難であるため今後の計画で取り扱いについて考慮する必要がある。

＜メッセージカード＞

また、引き取りの際提供者に対しその品物を受け取ることになる新入生へのメッセージを依頼した。このアイディアは品物を受け取った新入生のみならず提供者の側にも好評で、多くの提供者から心温まるメッセージが寄せられた。

＜保管＞

提供された品物は共用棟１階のスペースに一時保管し、引き取り日の午前または午後の受付時間終了時に総合研究棟 D 棟付近の倉庫へ搬入することとした。土曜・日曜の引き取りに備えこちらの担当者が金曜日に体芸支援室から倉庫の鍵を借り受け月曜日に返却するという流れであったが、担当者不在時の対応や倉庫の使用にかかる責任の認識について不十分さがあった。それが原因となり、臨時の引き取りを一任したスタッフが借り受けていた倉庫の鍵を紛失するという事態を招いてしまった。この件は本計画中最も反省すべきことであり、重大な教訓として深刻に受け止めている。

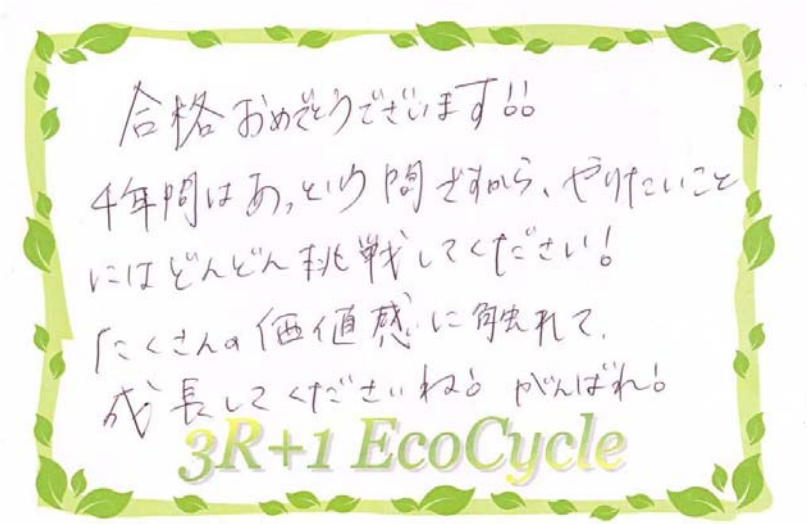
（詳細は別紙「鍵紛失問題の経緯」参照）

引き取り場所の設定にあたっては平砂・一の矢各宿舎管理事務所、保管場所の使用にあたっては大学施設部・体芸支援室の協力を頂くことができた。この手厚い支援により計画が効果的に運営できたことを強調したい。

大学敷地内の、しかも引き取り・受け渡し場所に近接した場所に立地する倉庫を使用できたことは、物品の運搬にかかる労力が最低限で済み 倉庫内で清掃作業をするなどある程度柔軟な使用が認められたという点でかなりの利点があった。他に学外の貸し倉庫や筑波大 OB の市民の所有する倉庫を借りるという方法も考えられたが、多大な経済的負担が発生すること・提供品の運搬に労力と環境負荷がかかること・学外の主体が関与することによる不都合が発生するおそれがあること などの理由のため学内での保管場所の確保に勝る策は考えにくい。今後取り組みを継続する上で、この件が安定した実行のカギとなる。

倉庫の位置と外観

メッセージカード例



コラム　宿舎入退去と冷蔵庫の問題

学生宿舎入居者にとって、生活必需品の中で冷蔵庫は特異な存在である。食料品・飲料などの保存のため最も必要性が高いものであることは言うまでもないが、入居の際実に 1500 人以上の新入生が新規購入し、それを各自あるいはアルバイトの配達員などが苦労しながら居室へ搬入する。多くの学生が１年で退去するためその際には搬出しなければならない（毎年３月末には冷蔵庫をはじめとした大型の家具・家電の運搬サービス業が出現している）。

大量の新規購入は私たちが問題視してきたことであり（3R の１つ、Reduce＝消費の減少）、ここに示した写真がその現実を象徴している。大型トラックに新品冷蔵庫が満載され、その一つ一つが居室に振り分けられていく。その裏側では、まだ使える冷蔵庫をリサイクルショップに売却しようとしたものの二束三文の価格しかつかなかったりかえって引き取り料金を請求されたという事例も耳にする。処分する場合も処理費用の負担を逃れて不法投棄される例が頻繁に起きている。

大量に搬入される冷蔵庫（一の矢駐車場にて）

新品の大量購入と生産性の低い労働の発生を抑えるために最も好ましいのが、冷蔵庫を居室の備品とし長期にわたって使用し続けるという方法だが、次善策としてリサイクルショップの利用を勧める・大型家電を中心に扱うリサイクル業者を厚生会で委託するという方法が考えられる。前述の 学生主体のリユース活動で取り扱うには困難であるという事実と、その反面応募を募った結果かなりの需要が存在するという事実が明らかになったことを受けて、何らかの抜本的対策が求められるとの問題提起としたい。

3-5. 実施段階③：Web サイト開設と応募メールの募集

運営メンバーの少ないこの取り組みにおいて、Web サイト・メールの利用は企画実行のカギを握った。

＜Web サイト開設＞

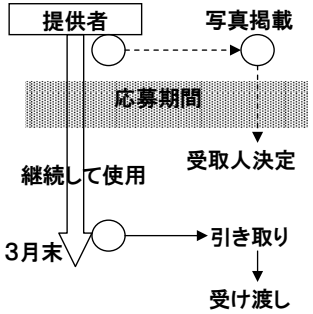
全代会厚生委員会の Web サイト内に「3R+1 EcoCycle」の特設サイトを作成し、そこで取り組みの説明・（在学生・卒業生へ）引き取りの方法と日時・（新入生へ）応募方法・諸注意などを周知した。この立ち上げと管理については全代会に依頼していたが、実際にサイトが作成され編集方法が伝達されるまで予想外に時間がかかった。次回からは今年度新たに設立された情報委員会の手腕が期待される。

品物が集まるのに合わせ随時一つずつの品物についての情報（品名・製造年・メーカー・消費電力・サイズ・備考）と写真を掲載していった。販売カタログのように、実際の品物の詳細な情報を伝えることで、応募者自身が使用することになる生活用品についての透明性を確保した。

写真の撮影・データ入力と Web サイト掲載を分担して行ったが、写真・データの受け渡しの際にミスが生じ、一組の品物の品番と写真が入れ替わって掲載されてしまった。これがそのまま修正されず、最終的に同一の品物に二人の当選者が決まってしまうという事態を招いた。スタッフが臨時で代替品を提供することで事なきを得たが、ケアレスミスと確認作業の不行き届きが大きなトラブルにつながった例として反省しなければならない。

＜提供品写真の先行掲載＞

提供された品物を Web サイトに掲載し応募を募るという方法をとったため、事前に品物の写真を撮影して Web サイトに掲載し、応募期間が終わってから引き取り保管するというやり方が可能になった。年度末の退居日まで使用を続ける電子レンジや炊飯器といった生活必需品を効率的に循環させるために有効な方法であり、今後の取り組みでは効果的な運用が望まれる。



＜応募メールの募集＞

前期合格者と後期合格者の決定時期に差があることと、品物の提供が３月末に集中することとを考慮し、応募を第一次（3/12～17）と第二次（3/27 正午～）の二つに分けた。時間的余裕のあった第一次応募は抽選による決定とし、新入生側・運営側ともにできるだけ早く結果を確定する必要のあった第二次応募はメールの先着順による決定とした。

タイトルと本文のみを区別して入力する形式の全代会のメールフォームを利用して新入生からの応募メールを募ったが、応募者ごとに希望する品番と氏名、メールアドレスを整理する必要があるためそれらの情報処理が合理的にできる申し込みフォームを準備することが求められる。今回は届いたメールからそれぞれの情報を手作業で一覧表にコピーした。

届いた応募メールの総数は延べ 330 通を超えた（応募者は 200 名以上）。広告を送付した新入生の数が約 2,700 名であったことを考えるとかなりの反応が得られたと判断できる。それだけ新

入生側に生活用品調達手段のニーズがあり、前の持ち主から品物を譲り受けるという概念も一般化しつつあるといえる。

＜応募者の傾向＞
応募は冷蔵庫と自転車への集中が特に顕著であった。新入生（とその保護者）の立場からすると、この二つはつくばでの単身生活で極めて必要度が高く早期に手に入れる必要があり、また重量・体積が大きいため自宅から運搬・配送することが困難である。引越しの際に大学周辺で購入するあるいは注文販売を利用するというのが簡単で安心な方法だが、安易に新品を購入することへの抵抗とその経済的負担の大きさにより、リユース品を利用したいという声が多いとみられる。この二品目の循環利用が浸透すれば、環境負荷の軽減のみならず大学内外で問題となっている不法投棄の問題も改善されるであろう。

3-6. 実施段階④：受取人の決定と連絡

第一次応募では品番ごとに希望者名を整理しコンピュータによる抽選で仮当選者を決定した。仮当選者には通知メールを送り、当日も連絡可能な本人または保護者の携帯電話番号を記入した返信メールが届いた時点で当選決定とした。確実に受取人と連絡をとるため返信の期限を設定し、期限までに返信がない場合は再抽選を行い同様に連絡をとった。後日改めて入居する宿舎地区と入居日を尋ねた。

第二次応募では 3/27 正午を受付開始時刻とし、品番ごとに応募メールが最も早く着いた応募者に通知メールを送り、本人または保護者の携帯電話番号に加え 入居する宿舎地区、入居日を記入した返信を求めた。期限を設け、返信がない場合は次点の応募者に同様の通知メールを送った。

＜通知メール例（第一次応募当選者へ）＞
○○　○○（応募者氏名）さん

このたびはご応募いただきありがとうございます。

抽選の結果、ご希望の No.○・○○○○（品番・品名）が当選しました。

受け取りご希望の場合は、3 月○日（○）のうちまでにこのメールアドレスへ返信をお願いいたします。その際、入居日当日もご連絡可能なご本人または保護者の方の携帯電話番号をお伝えください。その返信メールをもって当選決定とさせていただきます。

品物の受け渡し場所・方法については、後ほどご連絡いたします。

＊品質の確認にはできる限り注意しますが、お渡し後の品物のトラブルについては責任を負うことができません。また、受け渡し日に「3R+1 EcoCycle」運営のために協賛金を募りますので、ご協力お願いいたします。

＊多くの新入生に物品の新たな持ち主になっていただきたいため、今回第一次抽選で当選が決定となった方は、第二次応募に応募することができません。ご了承ください。

筑波大学
環境サークルエコレンジャー・厚生委員会
s0611179@ipe.tsukuba.ac.jp

筑波大生が主催している企画であることを明らかにするために、代表者・山本の学生用アカウントをメール送受信の窓口とした。メールによって伝えられた個人情報は山本・田中・志字が分担して編集・管理した。

受け渡し日（＝宿舎入居日 4/5,6,7）前までに２名を除くすべての受取人の携帯電話番号・宿舎地区・入居日を把握し、事前に品物を受け渡し日別に仕分けしておくことで効率的な作業ができた。（その２人からは携帯電話番号が伝えられず、受け渡し日当日も現れなかったため継続してメールを送ったが、連絡がとれなかった。）計画終了後、収集した氏名・メールアドレス・携帯電話番号などのデータはすべて消去した。

3-7. 実施段階⑤：品物・メッセージの受け渡し

＜当日へ向けての準備＞
受け渡し日に備え、山本・三橋・大谷を中心に当日のタイムスケジュールや手順を明確化するとともに、事前に設定した作業日に倉庫内で品物の清掃と受け渡し日別の仕分けを行った。並行して提供者からのメッセージをコピー・転記によって人数分用意した。

一の矢・平砂・追越各生活センター付近に品物を受け取りに来ることが困難な春日宿舎入居者やアパート入居者への対応策を検討し、春日宿舎入居者については 4/7 午後にスタッフ２人が車に品物を積んで春日地区へ向かい、指定の時刻に宿舎前で受け渡すこととした。アパート入居者については、可能な日時に各生活センターそばの受け渡し場所に来てもらう・車で倉庫付近に来てもらう といった対応をとることとした。どちらも受け渡し件数が少なかったため、このような方法での対応が可能であった。

＜当日の具体的な動き＞
全代会学内行事実行委員長が各学類の新歓委員を統括する学生組織「新歓ネット」への要請の結果設定された、各地区の生活センターそばの一区画を受け渡し場所とした。4/5 は追越・平砂地区、4/6 は平砂地区、4/7 は一の矢地区に受け渡し場所を設置した。当日の朝に当該箇所にテントを設営し、そこへ学生生活課職員の運転する大学所有のトラックで倉庫からその日受け渡しを行う品物を搬入した。多数の品物を３回に分けて運搬・引き渡ししたことは、各日の負担を軽減することにつながった。

＜受け渡し手順＞
　宿舎の入居手続きの開始時刻前に、その日の受け渡し物品と受取人、応対の手順、メッセージカードの用意などの最終確認を行い（詳細は添付資料 9-3.「受け渡し日へ向けて」参照）、受け渡しに備えた。受取人の新入生が訪れると、氏名を確認した後に携帯電話を用いた本人確認を経て、当選した品物とメッセージカードを渡すという方法をとった。カードを渡し「大切に使ってくださいね」と声をかけることで、この取り組みを「ものを大切に使い続ける」という精神を伝える有機的な形にすることができたと自負する。

＜自転車の受け渡し＞
　防犯上の考慮を必要とする自転車については、厚生会小田倉輪店の指導の下適切な手続きを経て受け渡しを行った。あらかじめ簡潔な譲渡証明書を作成し、引き取りの際提供者に署名を依頼、それをスタッフが保管し、受け渡しの翌週に受取人とともに小田倉輪店を訪問して防犯登録名義変更の手続きを行った。

　例年年度末に卒業生などによる自転車の放置が問題となるが、防犯登録がなされていればこのような簡単な方法で譲渡が可能である。今回は試験的に１台の自転車を扱ったが、この例を踏まえより幅広く自転車のリユースを行うことが考えられる。

＜運搬補助＞
　スタッフの人数が限られているため品物の居室への運搬は受取人の自己負担とすることを伝達していたが、特に運搬が困難な冷蔵庫に関してはこちらからスタッフを１人出し受取人本人と２人で運んだ。冷蔵庫の取り扱い自体検討する必要があるが、安全面と受取人の負担を考慮するとやはりこのような補助は行うべきであり、かかる労力を分散させるためにも学類新歓委員との連携をとるのが望ましい。

平砂生活センター前の受け渡しテント

4. 大学側の支援

　この取り組みのすべての過程において、大学側からの広範な支援を頂いた。新規に始められたこの企画が困難を乗り越え成功裏にひとまずの完結に至ったのは、私たちの意志を反映させ不足を補う 大学各局によるさまざまな支援の賜物である。

＜学生部学生生活課＞
　筆頭に、この企画について大学との直接の窓口となっていただいた大学学生部学生生活課を挙げたい。学生によるリユース活動について昨年度の早期より継続的にご考慮いただき、私たちの構想にご理解を示していただいたのみならず、関係各局との連絡・折衝を行っていただいた。ミーティングを重ねる中で適切な指導を頂き、計画の改善に役立てることができた。

　さらに実施段階においては、新入生への合格通知書類への企画告知文書の同封・品物の引き取り/保管/受け渡し場所の設定 などにおいてコーディネーターとしての役割を担っていただいた。それにとどまらず、トラブルへの対処や、受け渡し日朝に大学所有のトラックを稼動しての品物の運搬などご尽力いただいた点は多岐にわたる。

＜施設部・体芸支援室＞
　この企画の要となる学内の保管場所の設定に関しては、大学施設部ならびに体芸支援室のご厚意をいただいた。十分なスペースのある総合研究棟 D 棟付近の倉庫を使用できたことは企画運営の上でたいへん利益があったことであり、お借りしていた鍵を紛失するというこちらの不祥事にも寛大に対応していただいたことが今回の無事終了に結びついた。

＜学務部入試課＞
　大学公認の企画ということで、学務部入試課のご協力により入学試験合格者全員へ合格通知・入学関連書類に同封する形でこの取り組みの広告を届けることができた。結果として延べ 330 通もの応募が寄せられ、それ以上の数の新入生が Web サイトを閲覧しただろう。このような機会があったことで、新入生にとって今後の環境対策への理解が促進されたり 自分が引っ越す際にこういった取り組みに不用品を提供して次の人に使ってもらおうという意識が根付くことが期待される。

＜学生担当教員室＞
　学内広報誌「STUDENTS」への広告掲載においては学生担当教員室のご協力をいただいた。「STUDENTS」2007 年 2 月号に 1 ページの全面広告が掲載され、提供者の募集に役立った。

＜学生宿舎管理事務所＞
　引き取り場所の設定については平砂・一の矢 両学生宿舎管理事務所のご理解をいただき両地区生活センター1F ロビーの一部を使用させていただいた。さらに提供された電気製品の動作確認も生活センターの電源を使用して行うことができ、確実で合理的な運営が可能になった。

5. 提供者・新入生の反応

この取り組みにおいて、提供者・新入生と接することで感じられた反応や感想などについて述べる。

＜提供者＞

引越しで生活用品を処分する必要に迫られる学生はかなりの数に上るが、この取り組みへの品物の提供を申し出たのは 中でも特に意識の高い学生であったと思われる。私たちの姿勢に理解を示し、引き取る品物の範囲や日時など条件の設定があったにもかかわらず 快く提供してくれる提供者が大多数であった。

ある提供者から「中古品下取り業者に引き取ってもらってもわずかな金額にしかならず、それらの品物は高い価格をつけられて販売されることになる。そのようになるよりは新しく入学してくる後輩に無償で譲るほうがずっといい」という声が聞かれた。私たちはこの意見に注目し、大学を絆として先輩から後輩へ生活用品を引き継ぐという有機的な面をアピールすることで学生全体へこの活動を普及させていくことができると期待する。

＜新入生＞

メール募集の段階から、取り組みに対する評価の声が寄せられていた。応援のメッセージが書き込まれたものから品番のみというものまで応募メールの内容はさまざまであり、私たちの意図がどの程度伝わったのかは量りかねるが、少なくとも品物を受け取った新入生とその保護者の多くからは感謝とねぎらいの言葉が寄せられた。

（また、受け渡し日当日は筑波大学の腕章を身につけていた私たちに入居申し込みの会場や宿舎の特定の棟などの位置を尋ねる新入生が多く見られた。周辺に新歓委員は多数いたものの、学類に関係なくより気兼ねなくものを尋ねられる案内所の必要性が感じられた。）

自転車の受け渡し

6. 収支報告・協賛金について

＜収支報告＞

収入の部

協賛金　￥6,550-（6 件）

※腰塚担当副学長より　￥5,260-

小計　￥11,810-

支出の部

廃冷蔵庫処理費　￥6,970-

ガソリン代補助　￥2,000-（￥1,000-×2 名）

通信費補助　￥2,000-(￥2,000-×1 名)

メッセージカード・封筒　￥840-

小計　￥11,810-

計　￥　0-

※　事前に支出が収入を上回ることを報告した際、腰塚副学長の善意による寄付によって不足分を補うこととなった。

＜協賛金について＞

今回の取り組みでは、それぞれの品物に値段を設定せず無償による提供とし、新入生向け広告（添付資料 9-2.）と当選通知メール（3-6.内に例示）を通して呼びかけることで受取人各人の任意の協賛金を募ることとした。これは運営に掛かる費用が少ないと予想されたことと、「リサイクル市」時代の結果から任意の形でもある程度の金額が寄せられることを踏まえての方針であった。

さらに 2007 年 3 月末、環境 NGO「エコ・リーグ（全国青年環境連盟）」より、各大学の環境サークル等に対し学生が主体となって実施されている中古品市と電気用品安全法（PSE マークのない電気用品の中古売買を禁止している）の関連についての経済産業省の見解が伝えられた。

＜以下、経済産業省見解文＞

電気用品安全法の「販売」とは、「対価を受けることを条件として法の対象となる電気用品を他人に譲り渡すこと」となっております。よって、販売し対価を得、また毎年のようにリサイクル市として開催するのであれば、電気用品安全法上の販売の事業に該当すると考えられます。

電気用品を無償提供をし、活動協力金や寄付金をもらうということは、対価を得て販売していることと同じこととなりますので、電気用品安全法の販売に該当します。

しかし、無償提供するが、運送費等の実費をもらうということであれば、電気用品安全法の対象外となります。ただし、その運送費等が常識の範囲を超える額である場合は、販売と捉えられる可能性があります。

なお、個人間の取引の仲介を行う（あくまでも場の提供である）ということであれば、個人から場所代をもらうことは電気用品安全法の対象外となります。

お話しを伺う限りでは、サークルによって運用が異なるようですので、上記の考え方を基に個々の案件について判断いただくことになるかと思います。

＜以上＞

私たちの取り組みでは対価を条件とせずに譲渡を行うものであるため、「販売」にはあたらないと認識している。

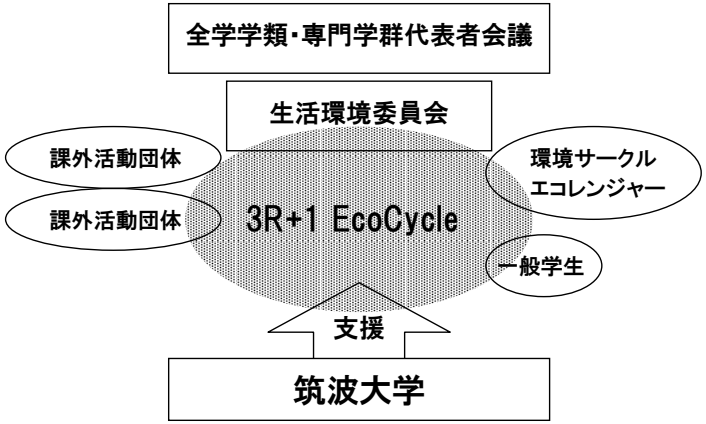
計画段階ではすべての受取人から一律かつ少額の金銭を集めることも検討された。これは実現しなかったが、次回以降の取り組みでは今回の結果を参考に必要経費の見積もりを立てた上で、経済産業省の見解を踏まえ一律の実費を受取人に負担してもらうことが考えられる。

7. 継続的開催へ向けての改善策

今回の取り組みは、これまで隔たった存在であった学生サークルと全代会の一委員会が主体となり大学から支援を受けるという前例を見ない形であったこと・合理性を求めた斬新な企画内容であったこと・企画の中心となったメンバーのほとんどが経験の浅い学生であったことなどから、数多くの反省点・改善点が露見した。今後この取り組みを継続していく上で、今回噴出したさまざまな課題を認識し、改善を重ねていくことでより理想的な形が実現できるものと確信する。新企画の立案と実行に携わった者として、将来の改善につながる点を示したい。

＜企画母体の位置＞

経緯説明で述べたとおり、本企画は厳密に言えば環境サークルエコレンジャーと全代会厚生委員会宿舎班の「中間」に誕生したものであった。好条件が重なり両者から積極的な参画を得たが、客観的に見ればこの存在は不安定なものである。「活動内容がそのときのメンバーの意思に委ねられる」というエコレンジャーのサークルとしての性格をも考慮し、より持続可能な運営形態を確立するためにはこの活動の基盤を全代会に置くことが望ましい。厚生委員会から改称した生活環境委員会を中心に課外活動団体と一般学生が対等な関係で参画して実行グループを形成し、その全体を大学が支援するという形をとることが効果的と考えられる。



＜企画開始時期＞

今回企画の立ち上げが年末になってしまったことは、各過程での準備不足や各人の独立した役割認識の不十分さという影響になって現れた。例えば学園祭実行委員会のように、実行の数ヶ月前に一定の構成員を確保し、明確な役割分担を行って分権的に計画を進めることが望ましい。

具体的には、10 月頃から広報活動を行って一般学生の認知度を高め、11 月上旬に生活環境委員会内の担当者を決め課外活動団体・一般学生から参加者を募る。二学期中に構成員の担当部局を決定し、三学期から部局ごとの業務に入れるようにする。この方法なら負担が一極に集中することが防げ、より効率的な運営が可能になると考えられる。

＜部局＞
　実行までの道のりにおいて、構成員を分けいくつかの業務を同時並行で進めることが不可欠である。定期的に構成員全員が集まる機会や各グループのリーダーが集まる機会をもつべきである。

　必要とされる部局は、
　・総合企画　　・広報　　・情報処理　　・渉外（保管場所・会場などに関して）
　・物品管理　　・会計
などが挙げられる。

＜広報＞
　２月上旬から一斉に広報が開始できるように準備を整える。「STUDENTS」、「Campus」、「筑波大学新聞」などの各発行元に早期にコンタクトをとり、広告掲載を依頼する。

　留学生などにも情報を伝達できるよう、一般広告は日英併記とし、留学生センター・一の矢生活センターなどに中国語版・ハングル版のポスターを掲示することが考えられる。

＜引き取り＞
　引き取りの期日は３月中に数回設ける。事前に準備を整え、引き取り場所にて即座に動作確認ができる体制を確立しておくべきである。これによって不良品の引き取りを防ぐ。持ち込みの場合は、動作不良で処分することになった際提供者が処理費用を負担することを引き取りの条件とする。

　提供者に対し、より積極的に取扱説明書の添付を求める。

＜利用者負担＞
　今回の収支を見るに、例外的にかかった費用を除いて運営そのものに必要な経費はそう多くない。しかし安定した運営のためには経費を受取人に少額ずつ負担してもらうことが望ましい。経済産業省から示された見解を踏まえて検討すべきである。

＜Web サイト＞
　提供品の写真・基本情報に加え、機能についてより詳しく伝えるとよい。

　氏名・メールアドレス・希望する品番などを整理して記録するための応募フォームを準備することが必要である。データ編集のための人的コストが節約できれば、より迅速な受取人決定が可能になる。

　担当者の他、複数のスタッフが逐次適切な表示・記述がなされているかチェックし、誤りがあれば即座に訂正できる体制を整えたい。スタッフが新入生へのメッセージや計画の進行状況などを気軽に書き込めるブログのようなものがあれば、スタッフが Web サイトにアクセスする機会が増え、新入生にとっても親しみの湧く企画となるのではないだろうか。

＜受取人決定方法＞
　抽選による決定・先着順による決定双方に長所と短所があるが、どちらにせよ第一・第二・第三当選者を決めておき、上位の当選者に連絡がつかない場合次の当選者に連絡をとるというプロセスが欠かせない。品物を受け取る新入生やその保護者に安心感を持ってもらい、運営側も余裕を持って受渡日に向けての準備を進めるためにも、受取人の確定は３月中に済ませることが望ましい。

＜受け渡し日＞
　新入生が一目でわかるような看板を設置するとよい。

　携帯電話を持たない新入生も見られるため、本人確認の方法を考慮するべきである。当選通知メールを当選証とし、印刷して持参してもらうことも考えられる。

コラム　家電製品の買い替え効果

　エネルギーの要らない「道具」として使い続けられる家具類をリユースすることは疑いなく有効なことであるが、電力を消費する「機器」である家電製品のリユースを行うことについては深い考慮が必要である。

　技術の発達と「トップランナー方式[1]」の導入により、家電製品の多くの種類でエネルギー効率が上がり、新しい製品のほうが省エネルギー効果は高いという傾向が続いている。特に冷蔵庫ではそれが顕著である。現に、環境省でもさらなる「省エネ家電」への買い替えを促進する政策が検討されている[2]。

　一方で、エネルギー効率ばかりが重視されれば新製品への買い替えが繰り返され、ものを大切に使い続けるという態度が軽視されるばかりか 製造・流通・廃棄のサイクルが活性化することで余計に環境負荷がかかることが懸念される。

　今後生活用品のリユース活動を続けていく上で、この両論のバランスを見極め、「家電製品については製造年の基準を設け、それ以前に製造された製品は扱わない」・「家具・道具の比重を増やすよう努める」などの対策が不可欠である。品物を次の使用者へ受け渡すことのみで満足せず、「環境」という包括的な視点から時代に合わせた改善を重ねていかなくてはならない。

---

[1] 省エネ法(エネルギーの使用の合理化に関する法律)における機器の省エネルギー基準設定の考え方であり、「エネルギー消費機器(自動車、電気機器、ガス・石油機器等)のうち省エネ法で指定するもの(特定機器)の省エネルギー基準を、各々の機器において、エネルギー消費効率が現在商品化されている製品のうち最も優れている機器の性能以上にする」というもの。

[2] FujiSankei Business i. 2007/4/9
http://www.business-i.jp/news/ind-page/news/200704090027a.nwc

8. スタッフ・協力者一覧

（2006 年度と 2007 年度とで名称・学年が異なるものについては「2006 年度の名称・学年/2007 年度の名称・学年」とした。）

主催　環境サークルエコレンジャー
　　全学学群・専門学類代表者会議 厚生/生活環境委員会 宿舎班

協力　筑波大学
　　学生部学生生活課
　　施設部
　　体芸支援室
　　学務部入試課
　　学生担当教員室/学生生活支援室

　　筑波学都資金財団 平砂学生宿舎管理事務所・一の矢学生宿舎管理事務所

学生スタッフ
　　統括　山本泰弘（環境サークルエコレンジャー・厚生/生活環境委員会 国際総合１/２年）

　　顧問　山崎麻佑子（環境サークルエコレンジャー 日本語・日本文化３/４年）

　　コアスタッフ　田中正美（厚生/生活環境委員会 図書館情報専門学群１/２年）

　　茂木卓也（厚生/生活環境委員会 工学基礎学類１/２年）

　　小野直子（厚生/生活環境委員会 工学基礎学類１/２年）

　　福井智広（比較文化学類２/３年）

　　志字剛太（環境サークルエコレンジャー 社会学類１/２年）

　　三橋淳史（環境サークルエコレンジャー 国際総合学類２/３年）

　　大谷尚史（環境サークルエコレンジャー 工学システム学類２/３年）

　　竹田千尋（環境サークルエコレンジャー 生物資源学類２/３年）

　　当日スタッフ　岡村祥太（国際総合学類１/２年）

　　掛澤侑希（環境サークルエコレンジャー 生物資源学類１/２年）

スペシャルサンクス　厚生会　小田倉輪店
　　ジョン=アダム=レボウィッツ（人文社会科学研究科講師）
　　工藤ハビエル明男（国際総合学類１/２年）

9. 添付資料

以下の資料は準備・計画段階のミーティングなどで用いられた資料のため、若干実際の活動と異なる点がある。

9-1.「3R+1 EcoCycle」原案（2006 年 11 月）

3R+1 Eco Cycle

原案：山本泰弘（環境サークルエコレンジャー　国際総合1年）

0.　理念

緑多き学園都市、つくば。その中心である筑波大学の学生宿舎において、外から見たイメージとはかけ離れた深刻な環境問題が発生し続けている。年度末・年度始の学生の大移動に伴う膨大な量の家具・家電の新規購入と廃棄だ。またまだ使用できるものが打ち捨てられ、新品が取って代わる。なぜ人々は何年も同じことを繰り返すのか？ その主要な原因は、手近に品物のリユースの仕組みがないことにある。

まだ使えるが不要になってしまったものを手放し、それを必要としている人に使ってもらう「リユース(Reuse＝再使用)」――3R のひとつとして一般的になりつつあるこの概念は、世界中で実践されている。利用できるものを捨てずに新たな持ち主に渡すことで、新品の家具・家電を買う必要はなくなる(Reduce＝消費の減少)。人から譲り受けたものをまた別な人へと引き継ぐことで、品物が長い間人から人へと使われ続ける(Recycle＝再循環)。そして、次の人へと受け渡すものだから と尊重の心を持ち大切にものを扱う(Respect＝ものを尊重する心)。筑波大学でリユースの仕組みを実践することは、世界が目指す「3R＋1」を根付かせることにつながるのだ。

1.　取り組みの経緯

リユース推進のための取り組みは、イベント開催形式の「リサイクル市」という形で 10 年ほど前から生物資源学類、環境サークルエコレンジャーと引き継がれ 2005 年度まで行われてきた。しかし長期にわたってこの事業を展開してきたエコレンジャーの内部で、「リサイクル市」を行う意義への疑問・メンバーへの過剰な負担・サークル規模の縮小などの要因により 2006 年度は「リサイクル市」を休止し抜本的な見直しを行わざるをえないという結論が出された。

そして 2006 年 12 月、全代会の申し出を受け部分的ながらエコレンジャーからのリユース推進の活動が再開した。

2.　目標

一、年度末・年度始の入退去者に焦点を当てた、家具・家電のリユースシステムを 環境サークルエコレンジャー・全代会・筑波大学の三者の協力のもと設立する。

一、リユースシステム設立を通し、新入生のみならず筑波大学の全学生に今地球規模で求められている Reduce(ごみの排出につながる消費の減少)、Reuse(ものの再使用)、Recycle(ものの再循環)、そして Respect(ものを尊重する心)の 3R+1[3]の理念を浸透させる。

[3] 「3R+1」は、ノーベル平和賞受賞者のワンガリ＝マータイさんが「MOTTAINAI」とともに提唱している概念です。

一、過去のエコレンジャーの経験を活かし、適切な規模と合理的な運営、3R+1理念の普及に心がけ 持続可能なシステムの構築と存続を目指す。

3. 参画主体

全代会　厚生委員会(宿舎班・厚生会班)　環境サークルエコレンジャー　学生ボランティア　筑波大学

対象主体

筑波大学在学生(提供)と、主に学生宿舎に入居する新入生(受益)

4. 企画概要

①計画段階

かつての取り組み(「リサイクル市」～2005)の問題点を指摘した上で、それを踏まえた新たなスタイルの計画原案をエコレンジャーが提示する。この原案をもとに、全代会・厚生委員会、エコレンジャー、一般学生(＋大学・宿舎関係者)の有志が実際の計画の詳細・原案の改善を話し合う。関係者間で合意した本案が出来上がった時点で、学生生活課などに提出し、大学側との調整・手続きなどを進める。

参考:エコレン「3R リースプロジェクト」計画表

2006/12　プロジェクト実行に向けての打ち合わせ
　　物品回収のマニュアル作成

2007/01　物品回収の広報スタート・・・搬入・保管も開始

02　新入生向け広報のスタート
　　(紫峰会、各専門学群・学類の新歓委員会、各種 Web ページなどで)

03　物品回収の本格化、広報の充実

(04　リサイクル市開催)

②品物の募集・受け渡し

品物の募集は、「連絡を受けその都度各戸にスタッフが車で品物を取りにいく」という方式から「あらかじめ期日・時間・場所を設定し品物を運んできてもらう/一部車で訪問する」という方式に改める。受け渡しについては、2005年度の事例を踏まえ「イベント開催形式」ではなく「事前申し込み・抽選決定方式」をとる。所定の回収・保管場所で清掃・ナンバリングなどを終えた後、新入生の宿舎入居日前に品物を各生活センターに運んでおき、前もって抽選した当選者を確認し、受け渡すことが考えられる。

品物の展示と希望申し込みは、Web サイト上で行う。品物の清掃・ナンバリングなどが済んだ時点で寸法・機能・品質情報などとともに写真をサイトに掲示し、申し込みメールを受け付ける。当選者決定にあたっては、契約を確実にするため新入生の保護者の方と連絡を取るのが望ましい。

これによって、年度いっぱい宿舎にとどまり品物を使い続ける提供者の部屋(または室外の廊下など)で品物の写真を撮りサイトに掲示することも可能になる。

＜課題:Web 管理・当選者との連絡など＞

③対象とする品物・審査

対象とする品物は、電子レンジ・炊飯器・電気ポット・スタンドライト・トースターなどの中型家電中心とする。これらは提供者・当選者各自での持ち運びが比較的容易であり、機能も単純であると考えられる。大型家電については、この取り組みが宿舎に入居する新入生を主な対象とするため洗濯機については取り扱わない。冷蔵庫は、人手の面から必然的に受入数は限られる。状態のよい品物を優先して選ぶことも考えられる。

パソコン・カーナビなどの情報機器については、点検が容易でないこと、データ破壊・ウィルス侵食の恐れがあることなどから取り扱わない。

安全と安心の面から、品物の取扱説明書・保証書なども提供するよう促す。また、新入生が受け取るのにふさわしくない、一定の品質と外観が損なわれた品物については受け取りを丁重にかつ断固としてお断りする。その際この取り組みの詳細や背景について説明する必要がある。

電源があるところを回収場所とし、その場で動作確認を行う。基本的に、「廃品回収のようなものではなく、新入生へ譲り渡すための一定のレベルを満たした品物を集めます」とアピールすることで提供者のモラルを確保する。

＜課題:点検方法の詳細＞

④品物の管理など

事前に提供された品物については、現時点で確保できているプレハブ小屋(場所の確認が必要)に集めて保管する。品目別にナンバリングし、サイズ・機能・消費電力・取扱説明書の有無などの情報を記録する。大きさが理解しやすいように(ペットボトルと並べるなど)工夫してデジカメで写真を撮り、調べた情報とともに Web サイトに掲示する。

品物に、このプロジェクトで扱ったリユース品であることを示すステッカーなどを貼り、3R+1 の理念とその品物を再びリユースができるように大切に扱ってほしいとするメッセージを伝える。将来的にはその表示がある品物が回収される際、一定の金額を提供(還元)することも考えられる。

⑤受け渡しまでの動き

受け渡し場所は各地区生活センターとする。宿舎入居日はかなりの混雑が予想されるため、前日または当日の早朝に品物を運び込んでおく。当選者の本人確認とプロジェクト説明を通して、品物を受け渡す。必要であれば当日スタッフが運搬を手伝う。

⑥金銭授受

もともとこの取り組み形式は以前の「リサイクル市」に比べ大きな費用を必要としないと思われる。「利用者が、無料という利益のみに目を奪われ本来の理念がないがしろにされる」という指摘も、新方式と綿密な情報提供で克服できる。その上で、生じるコストをまかなうために一律・小額の料金(¥500～1,000 程度?)を設定して当選者から集めることは可能である。繰越金は、再回収を促すための還元金・他の社会貢献(ユニセフ募金など)に活かすことが考えられる。

⑦広報

＜在学生向け＞

全代会・大学の協力のもと、学生向け広報誌への広告掲載・各掲示板へのポスター掲示などで品物の提供を呼びかけ、回収日時・場所なども指定する。その際、③で記した回収の対象を毅然と示し、また可能な限りこの取り組みの理念もアピールする。

＜新入生向け＞

合格者への郵便物に、この取り組みの概要と Web サイトへのアクセス方法を明記した広告を同封する。学内の家具・家電販売店の広告と同数・同時に送られることが望ましいが、新生活への準備期間が短いことへの救済措置の意味もこめて後期合格者のみへ広告を同封することも考えられる。

＜課題：「エコレンジャー」の名前をどの程度表に出すか／在学生・新入生へのリサイクルショップの紹介＞

【以下、2005 年「リサイクル市」に関わった山崎麻佑子さん（エコレンジャー　現在日・日3年）からのコメント】

2005 年に開催された「リサイクル市」の反省点・問題点をここに挙げ、３R＋１Eco Cycle へ還元をしていただきたく思います。

【リサイクル市中止の背景】

- 「リサイクル市」を行う意義
  ：物品の無償提供がリサイクル市の持つ基本的性質だったため、「無料でものが手に入る」ということだけで来場する人もいた。ものの争奪によって会場内が混乱したり、リサイクル市の本来の目的を（もののリユースによってものの大切さを）伝えることが困難であった。会場内の混乱をなくし、目的を的確に伝えていく新たなしくみが必要と考えられる。

- リサイクル市スタッフへの過剰な負担
  ：物品募集の広報に始まり、物品の回収・保管・点検、リサイクル市当日の運営、在庫処理に至るまでのスタッフの負担が課題であった。物品の回収にあっては、春休み中休みなしで回収にあたり、当日の運営においては約 40 名のスタッフを要した。現役エコレンメンバーのほか、エコレンジャーの OB・OG、学内から集めたボランティアなどで運営を行っていたが、余裕のある人数とはいえない状態であった。

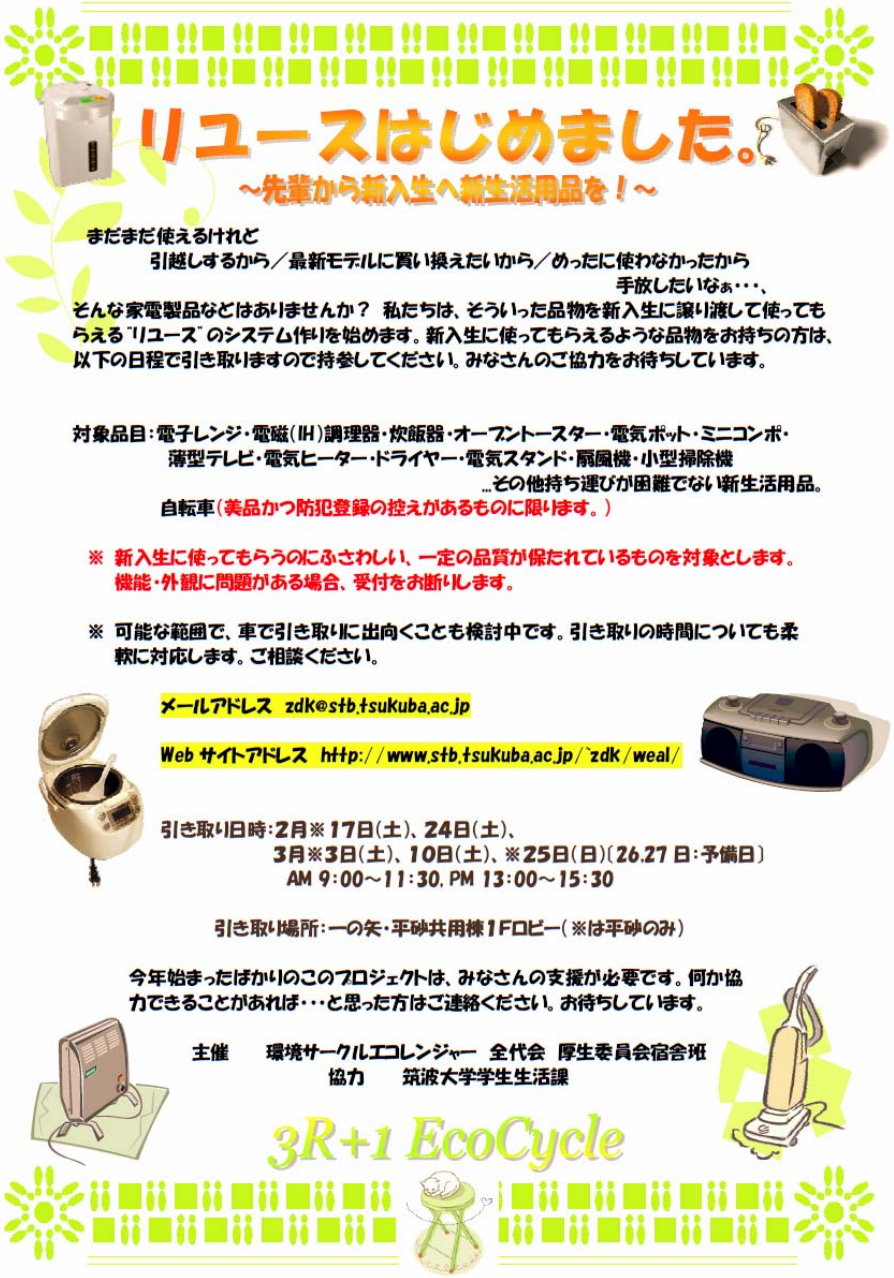
- サークル規模の縮小
  ：上記に加えて、サークルのメンバー数自体が減少したため、スタッフ不足という点においてリサイクル市を中止せざるをえなかった。

【新システムへの期待】

- エコレンジャー、全代会、筑波大学という三者による新しい持続可能なシステムの構築が期待される。
- エコレンジャーのみではできなかった体制ができるとよい。特に、配車や保管場所に関しては筑波大学の、スタッフに関しては全代会の協力が不可欠である。

9-2.「3R+1 EcoCycle」広告

＜在学生向け配布用（表面：ポスターとして掲示）＞



＜在学生向け配布用（裏面）＞

3R+1 EcoCycle

2006年、それまで「リサイクル市」を主催してきた環境サークルエコレンジャー（エコレン）は、この年の「リサイクル市」開催休止を決断しました。拡大する事業にメンバーのキャパシティと人数そのものが追いつかず、また“早い者勝ち”で品物を獲得するというイベント形式の中で、新入生側に家具や家電を再使用し続けることの意義が必ずしも期待していたほど伝わらなかったという事態が浮き彫りになったからです。

しかし、「リサイクル市」に対する周囲からの好評があったことは事実で、休止の決定に対し残念という声も少なからず寄せられました。さらに２００６年９月、筑波大学は従来の姿勢を改め環境に対する取り組みへの積極性を示す環境報告書を発表し、その際のワークショップでも「リサイクル市」の取り組みを評価する意見が続出しました。

この流れを受け、2006年末に全代会からエコレンに対し「リサイクル市」再開への協力が打診されました。当初はエコレン内でも消極的な意見が多数派でしたが、“とりあえず、従来の方式を改めた、負担が少なく少人数でも実現可能な新たなリユースシステムの計画を立てる”ということに一致し、この「3R+1 EcoCycle」の原案が作られたのです。

はじめエコレンと全代会の中間に生まれた「3R+1 EcoCycle」は、厚生委員会宿舎班・全代会情報委員会・筑波大学学生生活課の強力なバックアップを得て計画を運営し、新たなリユースシステムを実現させようとしています。この取り組みは２００６年度全代会活動報告・紫峰会報 UTlife に掲載される予定です。

私たちはこのような心強い支援に深く感謝するとともに、この「3R+1 EcoCycle」を機に筑波大学のすべてのみなさんに“いま、地球環境を守り私たちが持続可能な生き方をしていくための、より明らかな行動が必要”ということを胸に刻んでほしいと強く思っています。
わかりやすく言えば･･･、つくばの「エコモード」のスイッチを ON にしていこう！、ということです。私たちはこの取り組みで一度 OFF になりかけたつくばのスイッチをひとつ、ON にします。海外の多くの国で、あるいは日本の多くの大学で環境志向の取り組みが次々と行われるいま、まだまだ OFF のものごとや人が多いつくばですが、世界とともに、エコロジーなキャンパスライフを ON にしていきましょう！

「3R+１」は、ノーベル平和賞受賞者のワンガリ＝マータイさんが「MOTTAINAI」とともに提唱している概念です。
この取り組みにおける「3R+1」とは・・・

まだ使えるが不要になってしまったものを、必要としている人に使ってもらう
「リユース(Reuse＝再使用)」

利用できるものを捨てずに新たな持ち主に渡すことで、新品の家具・家電を買う必要はなくなる
「リデュース(Reduce＝消費の減少)

人から譲り受けたものをまた別な人へと引き継ぐことで、品物が長い間人から人へと使われ続ける
「リサイクル(Recycle＝再循環)」

そして、

次の人へと受け渡すものだから と尊重の心を持ち大切にものを扱う
「リスペクト(Respect＝ものを尊重する心)」

＜新入生向け郵送用（表面）＞

リユースはじめました。

～先輩から新入生へ新生活用品を！～

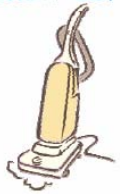
主催　　環境サークルエコレンジャー　全代会[1]・厚生委員会宿舎班
協力　　筑波大学学生部

合格おめでとうございます。4月からつくばでのキャンパスライフが始まります！

学生の引越しが集中するこの時期、大学周辺では毎年まだまだ使える家具・家電が大量に排出され、深刻な問題になっています。使えるはずのものが捨てられ、安易に新品が持ち込まれる状況を変えていくため、私たちは今年から"リユース"のシステム作りを始めます。在学生・卒業生が手放す家具・家電を 新入生に引き継いで使ってもらうための仲立ちをすることが、この取り組みの目的です。

2月から3月にかけ、在学生・卒業生に呼びかけて中型家電[2]を中心とする新生活用品の提供を募りました。廃品回収のようなものではないことを明らかにするために「新入生に使ってもらうのにふさわしい、一定の品質が保たれているもの」を対象とすることを強調し、利用者視点を重視したサービスに努めています。

品物が集まり次第、写真・機能情報を以下の Web サイトに掲載します。希望する品物を選び、Web 上のフォームに必要事項を記入の上ご応募ください。第1次応募は抽選で、第2次応募は先着順で受け取る方を決定し、できるだけ早く結果をお伝えいたします。詳しい実施スケジュールについては、裏面をご確認ください。



Web サイトアドレス　http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~zdk/weal/

メールアドレス　zdk@stb.tsukuba.ac.jp

受け取りが決定した方に関しては、以下の日程で品物をお渡しします。

受け渡し日時：4月5，6，7日　10:00～16:00
受け渡し場所：5，6日・・・平砂・追越生活センターそば
7日・・・一の矢生活センターそば
（春日地区の方については、個別に対応します。）

[1] 「全代会」とは筑波大学の公式な学生組織「全学学類・専門学群代表者会議」の略称です。中学・高校の生徒会に相当する役目を果たす組織とご理解ください。

[2] 在学生・卒業生に対して、対象品目として電子レンジ・炊飯器・ミニコンポ・電気スタンドなど約 10 品目を例示しました。実際どのような品物が集まったかについては、Webサイトをご覧ください。

＜新入生向け郵送用（裏面）＞

＜実施スケジュール＞

3／（在学生・卒業生から提供された品物を逐次 Web サイトに掲載）

12　第1次応募（抽選）開始（～17日まで）

18　第1次受取人決定

19　後期試験合格発表・合格通知等発送・入学手続き開始

26　第2次応募（先着順）開始（受取人は3月中に随時決定）

4／5. 6. 7　受け渡し（5日・6日・・・平砂・追越にて、7日・・・一の矢にて）

（当日、わずかながらリユース食器の配布も企画しております。応募不要ですので、ぜひ受け渡し場所までお越しください。）

＜注意事項＞

品質の確認にはできる限り注意しますが、お渡し後の品物のトラブルについては責任を負うことができません。この点につきご了承いただける方のみ、ご応募ください。

学生一人につき応募できる品物の数を制限させていただきます。詳しくは Web サイトでご確認ください。

受け取りが決定した方には、受け渡し当日連絡用の携帯電話番号をお聞きします。全応募者のメールアドレスも含め、個人情報については厳重に取り扱い、この事業以外の目的での使用は一切いたしません。

3R+1 EcoCycle

「3R+１」は、ノーベル平和賞受賞者のワンガリ＝マータイさんが「MOTTAINAI」とともに提唱している概念です。
この取り組みにおける「3R+1」

まだ使えるが不要になってしまったものを、必要としている人に使ってもらう
「リユース(Reuse＝再使用)」

利用できるものを捨てずに新たな持ち主に渡すことで、新品の家具・家電を買う必要はなくなる
「リデュース(Reduce＝消費の減少)

人から譲り受けたものをまた別な人へと引き継ぐことで、品物が長い間人から人へと使われ続ける
「リサイクル(Recycle＝再循環)」

そして、

次の人へと受け渡すものだから　と尊重の心を持ち大切にものを扱う
「リスペクト(Respect＝ものを尊重する心)」

＜在学生向け英語版＞

Let's Begin Re-use!

～Livingware for Newcomers～

"I want to throw 'it' out because of
Moving house / Upgrade / Low frequency of use…, but 'it' is still good condition!"

Do you have such compact appliances? We're starting "Re-use" system so that new students coming to Tsukuba can live economically & ecologically. If you have unnecessary compact appliances which are still useful, please bring them according to the following conditions.

We're looking forward to your cooperation!

Target goods : Microwave oven, IH cooker, Rice steamer, Toaster oven, Electric pot,
Mini-audio set/player, Flat-screen TV, Electric heater, Drier, Desk lamp,
…and anything easy to carry like those

※ We would like certain quality goods for newcomers in order for them to begin their brand-new lives. We cannot accept default items.

※ We're planning to pick up the goods by car. We're flexible in time to receive the goods. Please contact us.

Mail address　zdk@stb.tsukuba.ac.jp

Website address(Japanese)　http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~zdk/weal/

Receipt time & date:Feb. ※17(Sat), 24(Sat),
Mar. ※3(Sat), 10(Sat), ※25(Sun)〔26,27:occasional date〕
9:00～11:30 AM, 13:00～15:30 PM

Receipt place:Ichinoya & Hirasuna Common Building 1F(dates with ※ only at Hirasuna)

This activity has just started up this year, so we need your help.
Feel free to mail us!

Presented by　Environmental Circle EcoRanger , Official student body Zen-Dai-Kai
Supported by　University of Tsukuba office campus life section

3R+1 EcoCycle

9-3. 運営ガイドライン（2007 年 1～2 月）

情報処理関係

原案：山本泰弘（環境サークルエコレンジャー）

1.Web サイトの開設

このプロジェクトの情報伝達の基盤となる Web サイトを作る必要がある。目的を挙げると、

① プロジェクトの存在とその理念・仕組みなどを発信する。
② 品物の提供者へ回収対象・方法を知らせる。
③ 回収した品物の情報を掲載し、新入生からの応募を受け付ける。
④ 各種問い合わせの窓口となる。

がある。

情報委員会に作業を委託し、全代会のサイト内に 3R+1EcoCycle のサイトを作る。広報する際は全代会のサイトからアクセスできることを伝える。以下のような枠組みを初めに作り、文章や提供品の情報などについてはコアスタッフ内で決めた情報担当が逐次更新する。

コンテンツ

① トップページ（参画主体・ひとこと説明・問い合わせ先メールアドレス）
② 理念と筑波大宿舎へのリユースシステムの必要性の説明
③ システム図解・スケジュール
④ 諸方針（個人情報管理について・抽選の上決定するということ・トラブルへの補償はできないこと）
⑤ 提供品情報掲載ページ
⑥ 申し込みフォーム
⑦ ブログ・・・？（希望者がいれば。）

2.提供品情報の掲載

設定した提供品回収日時に、同時並行で写真撮影（大きさの比較になる物とともに）・必要情報の記録を行う。一つ一つの品物ごとに画像と情報テキストをまとめ、情報担当が掲載・更新する。

必要情報

① 製造年・メーカー
② サイズ
③ 機能の特徴
④ 消費電力
⑤ 取扱説明書の有無
⑥ 使用期間と状態
⑦ 提供者からのメッセージ

3.申し込みメールの受付

Stb サーバでメールアカウントを作成し、申し込み先とする。情報の管理と抽選は情報担当の裁量に任せたい。

申し込みメールの必要記入事項

①本人氏名・保護者氏名
②希望する提供品番号
③連絡先メールアドレス（PC・携帯）

4.応募者との連絡

申し込み締め切りの時点から可能な限り早いうちに抽選を行い、まず当選者に通知メールを送る。期限（2日間くらい）までに返信を求め、反応がない場合は再び抽選する。

当選者に伝えてもらう情報

① 本人（または入居日当日同伴する保護者）の携帯電話番号
② 電話連絡可能な時間帯
③ 入居する宿舎地区

当選者に伝える情報

① 受け渡し場所・目印
② 入居日前日にも連絡を取るということ
③ こちらの連絡先電話番号

当選決定の時点と入居日前日の2回、当選者本人または保護者に電話連絡を取る。
※電話連絡の際、こちらの身分を明らかにする！

5.落選者への通知

品物別に、当選者と連絡が取れた時点で落選通知メールを送る。文面はあらかじめ用意しておく。

6.情報担当の任務

新入生からの応募が始まる前は、全代会から転送されてきた EcoCycle 関連のメールを「提供の申し出」・「質問・意見など」に分類する。提供の申し出については品物、持参/回収日時、メールアドレスなどを記録し、了解のメールを送る。質問・意見その他は山本まで転送する。情報担当で答えられるような内容であればそのまま回答してほしい。

広報

＜在学生へ＞

新入生のみならず在学生全体の意識向上を図るためにも、広告対象はある程度の規模が必要である。提供品の条件を高く設定するため、提供者の母集団を大きくする必要もある。

1.メディア
①全代会発行の学生向け広報誌「Campus」
②筑波大発行の学生向け広報誌「STUDENTS」
③筑波大学新聞
④学内掲示板
⑤宿舎掲示板
⑥チラシ（各図書館への設置を想定。）
⑦全代会 Web サイト
⑧筑波大 Web サイト
⑨クラ代を通して連絡（メーリス？）

2.掲載情報
①取り組み概要（＋理念）
②回収対象・それについての注意事項
③回収方法・受付日時
④Web サイトアドレス
⑤連絡先メールアドレス
⑥主催者
⑦プロジェクト協力者の募集

※注意事項

新入生へ譲り渡すための一定のレベルを満たした品物を集めることを強調し、廃品回収とは違うこと・品物によっては引き取りを断る場合があることを明記する。取扱説明書も提供してもらうよう呼びかける。

＜新入生へ＞

家電の新規購入だけでなくほかの選択肢もあるということを新入生側に考慮に入れてもらうため、厚生会電機店の広告と同時かそれ以前に新入生へアクセスの機会を提供する必要がある。

3.メディア
①入学／宿舎関連書類封書
②全代会 Web サイト
③筑波大 Web サイト
④エコレンジャーWeb サイト

4.掲載情報
①取り組み概要（＋理念）
②対象となる（集まっている）品物の種類
③申し込み方法/締め切り・それについての注意事項
④Web サイトアドレス
⑤連絡先メールアドレス
⑥主催者

※注意事項

一定の基準を満たした品物を扱っていることを伝えた上で、使用上のトラブルについては責任を負うことができないことを明記する。正式な学生団体が運営していることを明らかにする。

5.作成する広告の種類
①在学生向け誌面用広告
②在学生向け掲示・配布用広告（A4・A5 両面カラー印刷を想定。）
③新入生向け広告（入学関連書類に同封。）
④Web サイト掲載用広告（①、②、③を組み合わせる。）

6.広告元とのコンタクト
①「Campus」・・・全代会広報委員会
②「STUDENTS」・・・学生担当教員室
③筑波大学新聞・・・筑波大学新聞編集委員会
④掲示板・・・各学群の学生支援室・宿舎管理事務所
⑤チラシ・・・設置場所管理者
⑥筑波大 Web サイト・・・総務部広報課
⑦入学／宿舎関連書類を扱う部署
⑧学内行事実行委員会新歓担当・新歓冊子スタッフ

＜課題：内容確定・製作・交渉のスピードと役割分担＞

＜やること＞

まず、学生生活課に進み具合を報告に行くとともに、この取り組みへの反応を聞きに行きます。入学関連書類についても問い合わせ先を聞いてきます。CAMPUS 配布 BOX について各学群の支援室に聞きに行きます。

情報関係はひとまず小林先輩に任せるとして、広報を出すために必要な具体的な事柄（回収方法・日時など）を決めていきましょう。次回原案出します。

今の段階で「情報担当」という役が必要になってます。エコレンメンバーにも聞いてみますが、やれるかどうか考えてみてください。広告クリエイターもいてほしいです。

≪課題1≫　提供者の範囲
① 原案通り、3月中旬までに品物を持ってきてもらえる人
② 3月末に引越しをする卒業生
③ 一般市民の方

≪課題2≫　抽選日
① 前期合格者のみを対象とし、3月中旬
② 後期合格者も対象にすることを考え、3月下旬
③ 卒業生からの提供を待って、3月末

≪課題3≫　回収の日時・方法
① 原案の時期を遅らせ、2月下旬～3月上旬の土曜日（＋車）
② 卒業生からの提供を期待し、3月最終週（＋車）
・・・①は前期合格者のための抽選応募用・②は後期合格者のための先着応募用と振り分けるのはどうでしょう？

≪課題4≫　写真つき応募の信頼性

（主に卒業生を対象とし、）写真と関連情報つきで応募してもらい、Web に掲載して回収より先に新入生からの応募を受け付ける。3月末に回収する。

↓

動作確認をどのように行うか？

提供品回収・保管方法

旧「リサイクル市」と異なり、今回の取り組みにおいては提供品の運搬にかかる負担を可能な限り軽くしたい。より積極的な学生の協力を促すことで当事者意識を持ってもらい、持続可能な活動を形作る上でもそれが大切である。

1.基本事項

・受付日時・場所を設定する。
・なるべく事前に連絡してもらう。
・基本的に提供者が回収場所に品物を持参する。
・持ち運びが困難な場合、適宜スタッフが手伝う。
・広告に掲載した上で、回収場所で動作・外観の確認を行い不備があった場合受け取りを断る。
・回収と同時進行で提供品の必要情報を記録する。
・受付時間終了後、保管場所(総合研究棟 D 棟付近倉庫)に集まった提供品を運ぶ。

2.受付

①日時:2月下旬～3月中旬の土曜日(2～4回)、午前 9:00～11:30、または午後 14:00～16:30
　　卒業式(3月23日)直後の日曜日、午前 10:00～午後 15:00・・・※即 Web にアップ
②場所:一の矢・平砂生活センター1階ロビー
③スタッフ:環境サークルエコレンジャー、厚生委員会宿舎班・厚生会班、(＋全代会)の中から協力できる人を募る。
　(一の矢・平砂それぞれ4～5人いれば十分・・・？)

3.必要情報

①製造年・メーカー
②サイズ(縦・横・奥行き)
③機能の特徴
④消費電力
⑤取扱説明書の有無
⑥使用期間と状態
⑦提供者からのメッセージ

4.実際の流れ

提供者からの連絡(メール)を受ける。
↓
提供者の名前、提供品、受付日時・場所を確認する。
回収場所で動作・外観の確認を行い不備があった場合受け取りを断る、ということを確認する。
(できれば必要情報も伝えてもらう。)
↓
(持ち運び困難な品物については、時間を決めてスタッフが手伝いに行く。)
提供者が品物を持ってくる。
↓
簡単にプロジェクトの説明。
動作・外観の確認を行う。
↓
※

提供者に名前・品物の種類・使用上の注意・新入生へのメッセージなどを記入してもらう。
↓
提供者にお礼を伝え、今後の協力をお願いする。
↓
スタッフが写真を撮影し、必要情報を記録する。
一の矢・平砂それぞれ集まった順に(仮)番号をつける。
↓
受付時間終了後、集まった品物をスタッフの車でプレハブ倉庫へ運ぶ。

※受け取りを断る場合
　理由を説明し、リサイクルショップ・処分の仕方を紹介する。

5.引き取りの際に注意する点

・製造年　・外観　・機能　・音　・臭い？

受け渡し日へ向けて

原案：山本泰弘（環境サークルエコレンジャー）

1. 現状と課題

倉庫カギ問題 → 別紙参照。

「この取り組みの運営と完結を第一に」ということで倉庫の継続使用が許可されました。
対策として今後は山本が責任を持って厳重に鍵を管理します。
平砂共用棟に一時保管していた品物類は倉庫に搬入済み。

倉庫内の物品

①No.21の冷蔵庫を搬入する。（3/30）
②No.54（机・椅子），55（冷凍冷蔵庫）のサイズを測る必要がある。
③No.55（冷凍冷蔵庫），56（カーテン）の写真を撮る必要がある。
④一部ナンバリング・機能チェックが済んでいないものがある。
⑤多くのものについて清掃が済んでいない。
⑥スムーズに搬出ができるよう1日目・2日目・3日目の物品を分けておく必要がある。

→ 3/30に短時間鍵をお借りし①，②，③を行う。4/2に長時間鍵をお借りし④，⑤，⑥を行う。

Webサイト・応募メール対応

3/12～17 第一次応募開始 → 26日までにほぼ全員へ通知発送完了
3/27～ 第二次応募開始 → 随時当選通知を発送、連絡先把握

2. 当日までのスケジュール

3月中 ガイドラインを作成・関係者に伝達
山本を中心に学生生活課と原案をもとに打ち合わせを進める

3/30 10:00～12:00 1-①，②，③の作業を行う。

4/2 9:00～16:00 1-④，⑤，⑥の作業を行う。

4/4 学生生活課とエコサイクル関係者で直前ミーティング
事前準備作業

4/5 受け渡し・・・追越・平砂
/6 平砂
/7 一の矢（・春日）

3. 前日・当日タイムテーブル

4/4 山本、体芸支援室から鍵をお借りしておく
13:30～ 本部棟からリヤカーを借り、図書館下からテント（1張でOK。）を、1C204 から長机を平砂倉庫へ運搬

4/5 7:00 平砂共用棟前集合
倉庫からテント・長机を平砂・追越にそれぞれ運搬・設置
追越娯楽室から椅子（3脚）を追越に運搬・設置
8:30～ トラックで倉庫からこの日受け渡す物品とシートをテントに運搬
（倉庫とテントとに二手に分かれる）
追越で渡す品物はリヤカーで移動。
9:30～ 受け渡し対象者と品物・受け渡し予定時刻の確認
10:00～ 受け渡し時間開始

この日の受け渡しが完了した時点で追越のテントを撤収。全代会室に移動させる。
平砂のテントは脚を折っておく。

4/6 8:00 平砂共用棟前集合・テントを立ち上げる
8:30～ トラックで倉庫からこの日受け渡す物品をテントに運搬
9:30～ 受け渡し対象者と品物・受け渡し予定時刻の確認
10:00～ 受け渡し時間開始

この日の受け渡しが完了した時点で平砂のテント・長机を撤収。
リヤカーとともに全代会室・1C204 に移動。

4/7 7:00 全代会室前集合・全代会室からテントを、1C204 から長机を一の矢へ運搬・設置
8:30～ 土子さん運転のトラックで倉庫からこの日受け渡す物品をテントに運搬
9:30～ 受け渡し対象者と品物・受け渡し予定時刻の確認
10:00～ 受け渡し時間開始

この日の受け渡しが完了した時点で一の矢のテント・長机を撤収し、
全代会室・1C204 へ返却。リヤカーを本部棟へ返却

※ 各日の終了時刻は受け渡し対象者との調整の上で見積もる。

4/10 リヤカーの鍵を本部棟へ返却

4. 準備が必要なものごと

①運搬用トラック → 学生生活課の方に手配していただいています。
②リヤカー → 学生生活課に申請。
③テント・長机 → 新歓ネットで確保。長机は1脚で十分か？
④椅子 → 本部棟から不要になったもの（4脚）をもらえます。
⑤「3R+1 EcoCycle」の掲示 ・・・未定。A3 ポスターで対応可？
⑥メッセージカード → 転記・コピーをして必要枚数を用意

5. 受け渡し対象者への対応

連絡がついている対象者に再度メールを送り、宿舎の地区と入居日を伝えてもらう。その際当日のこちらの連絡先（山本＋もう1人の携帯電話番号）を伝える。こちらで補助を出せる人数には限りがあるので基本的に運搬は各自で行ってもらいたいことも伝える。

6. 受け渡しマニュアル

（事前にメールで受け渡し日時・場所を連絡しておく。）

当選者が訪れる。

↓

名前と品物のナンバーを確認する。

↓

本人確認（その場でリストの電話番号に電話をかけ、本人の携帯に着信したら○？）。

↓

品物（＋取扱説明書・付属品）とメッセージカードを出す。

大切に使い続けてほしい旨を伝え、お渡しする。

今後のご協力をお願いする。

↓

リストにチェック

9-3. 提供品一覧

第一次応募対象品（全 46 点）

No.	提供品名	提供者	引き取り日	受取人入居地区
1	冷凍冷蔵庫	学類生	3月3日	平砂
2	折りたたみイス	学類生	〃	一の矢
3	冷凍冷蔵庫	学類生	3月31日	平砂
4	オーブンレンジ	卒業生	3月10日	平砂
5	電気ヒーター	〃	〃	平砂
6	電気調理器	〃	〃	平砂
7	折りたたみ机・イス	〃	〃	春日
8	マットレス	〃	〃	平砂
9	敷き布団	〃	〃	（8とセット）
10	折りたたみベッド	〃	〃	アパート
11	4連衣装ケース	〃	〃	一の矢
12	衣装ケース×4	〃	〃	一の矢
		〃	〃	平砂
		〃	〃	平砂
		〃	〃	追越
13	書棚	〃	〃	追越
14	冷凍冷蔵庫	卒業生	〃	一の矢
15	電子レンジ	〃	〃	平砂
16	電子レンジ	院生	3月11日	平砂
17	電気ポット	〃	〃	追越
18	小型扇風機	〃	〃	平砂
19	電磁調理器	〃	〃	平砂

No.17　電気ポット

No.26　炊飯器

No.53　電子レンジ

第二次応募対象品（全 46 点）

No.	提供品名	提供者	引き取り日	受取人入居地区
20	自転車	卒業生	3月15日	追越
21	冷凍冷蔵庫	学類生	3月30日	平砂
22	ロフトベッド	学類生	3月15日	アパート
23	冷凍冷蔵庫	卒業生	3月25日	一の矢
24	炊飯器	〃	〃	平砂
25	電気ポット	〃	〃	一の矢
26	炊飯器	卒業生	〃	一の矢
27	冷凍冷蔵庫	〃	〃	アパート
28	電気ヒーター	卒業生	〃	平砂
29	こたつテーブル	〃	〃	一の矢
30	電気ポット	〃	〃	平砂
31	MD/CDラジカセ	〃	〃	一の矢
32	電気スタンド	〃	〃	平砂
33	パソコンデスク	〃	〃	一の矢
34	衣装ケース	〃	〃	一の矢
35	机	〃	〃	アパート
36	食器棚	〃	〃	平砂
37	イス	〃	〃	アパート
38	冷凍冷蔵庫	学類生	〃	平砂
39	体重計	〃	〃	春日
40	テレビ	〃	〃	追越
41	電子レンジ	〃	〃	春日
42	掃除機	〃	〃	一の矢
43	テーブル	学類生	3月26日	追越
44	カラーボックス	〃	〃	平砂
45	スチールラック	〃	〃	一の矢
46	電気ポット	〃	〃	一の矢
47	テレビ	〃	〃	平砂
48	電気ヒーター	〃	〃	春日
49	オーブンレンジ	〃	〃	平砂
50	冷凍冷蔵庫	〃	〃	春日
51	冷凍冷蔵庫	学類生	〃	平砂
52	冷凍冷蔵庫	院生	3月17日	平砂
53	電子レンジ	学類生	3月26日	平砂
54	机・椅子	卒業生	〃	アパート
55	冷凍冷蔵庫	〃	〃	追越
56	カーテン	学類生	〃	一の矢
57	フットウォーマー	学類生	〃	平砂
58	電気ポット	〃	〃	平砂
59	テレビデオ	〃	〃	春日
60	電気スタンド	〃	〃	平砂
61	衣装ケース	〃	〃	追越
62	カラーボックス	〃	〃	平砂
63	パズル式床マット	学類生	〃	一の矢
		学類生	〃	一の矢
		学類生	〃	平砂
64	つっぱり棒	学類生	〃	平砂

※　提供者欄の「〃」は品物を提供したのが上と同一の人物であることを表す。

※　No.3,21 は写真を先に Web サイトに掲載し、受取人が決定してから引き取りを行った。

2007 年 6 月 5 日　発行

執筆・編集　山本泰弘（環境サークルエコレンジャー・生活環境委員会 国際総合２年）